

## 歴史点描 25 垣内の河野桂蔭

弟ばかりが何故モテる、そんな<sup>つぶや</sup> 呟きが季節の風に誘われて寶積山万福寺の墓地の一角から聞こえてきた。呟く主は河野桂蔭、河野鉄兜の兄である。『網干町史』には、垣内の河野蘭台の二子として文政3年(1820)垣内村に生を<sup>う</sup>享けた。父蘭台は垣内の医者で桂蔭自身も医者であった。モテる第二人は漢詩人であり、豪快な書を多く遺した河野鉄兜と次弟の東馬、後年林田藩の藩校敬業館の教授になった鉄兜の知られざるエピソードに、慶応元年(1865)親しく交わっていた林田川上流沿いの八重垣酒造の銘酒に「箆(えびら)」と命名したが、酒造会社に問い合わせると15年ほど前に製造を中止し、名残の物は何も残っていないらしい。東馬は私塾「誠塾」を創設し子弟の教育に力をそそいだ。第二人は数々の功績が<sup>いま</sup>現在も語り継がれているものの、兄の桂蔭には医者の業績はおろか鉄兜や東馬の兄であることすら知る人は少なく、高名な第二人の陰に隠れ話題に乏しい。再び「町史」に目を通すと桂蔭は医を中西氏に学び、儒教を吉田鶴仙<sup>よしだかくせん</sup>に学んだと記す。鶴仙について『日本人名大辞典・講談社』は讃岐国丸亀藩の藩校敬止堂助教で、鉄兜はその門下生だと載せる。すると兄弟ともに鶴仙に師事したということになるのだろうか。

明治3年の網干陣屋跡の図に講武所なるものが描かれている、桂蔭・鉄兜の学び舎か、との可能性もあるがはっきりしない。町史には項を変えて鉄兜誕生の地は当時のまま残り、往時は前庭に四坪(12 畳)の寺子屋があったと記す。はて誰が教授だったのだろうか。父蘭台と桂蔭の墓石台座には、ともに門人中の文字が刻まれている。

桂蔭は元治元年6月年45才で没、早い死であった。

網干歴史講座 垣内 田中早春



船喰い虫の痕跡、船底板転用の表門



河野鉄兜生家跡、寺子屋は碑の  
辺りにあった



右端桂蔭先生の墓、左奥から  
二つ目蘭臺先生の墓